

北川金三郎

北川金三郎は明治 13 年に鍛冶町の桶屋の三男として生まれた。左官屋を営み成功した人でもあった。同じ町内の坂田金作についてねぶた作りを学び、若い頃から自分で製作したといわれる。金三郎は坂田流のねぶたを厳密に踏襲したというが、それに満足せず既製のものを大きくアレンジすることのできた稀有な製作者であった。そして、理想的なねぶた人形としての完成を目指した。桃太郎であってもどういう格好で鬼を押さえ付けるのが観客に映えるかを常にさぐった。金三郎のねぶたは立ち姿が真っすぐではなくひねっていた。

戦後、ねぶたはすぐに復活するがその中心は 60 歳を過ぎた金三郎であった。「北川のジサマ」と呼ばれるようになる。「北川のオンチャマ」こと息子啓三もねぶたを手掛けるようになる。金三郎はねぶたに新しい素材や技術を意欲的に取り入れた。骨を従来の竹から針金に変えたり、蛍光灯を照明に使用したりした。そして、最高傑作といわれる『勸進帳』(昭和 32 年東北電力)が生まれた。

金三郎はまた息子北川啓三、佐藤伝蔵ら多くの弟子を育て上げた。まさしく青森ねぶたの中興の祖ともいえるべき存在であった。それで、昭和 34 年にねぶた関係者の創意により初めて「ねぶた名人」の称号が与えられた。その翌年の昭和 35 年に他界。

青森ねぶた誌(平成 12 年 3 月 31 日発行)から